

カウンセリングを視野に入れた授業構築

—— カウンセラーとの協働プログラム ——

報告者 センター研究員（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭） 鈴木 一 史

1. 授業形態と生徒のプレッシャー

教室内で生徒が発言するにはかなりの勇気がある。自分の発言が受け入れられるかどうか、自分の考えが拒絶されないかどうか、生徒の心は千々に乱れる。少人数やグループ学習ではそれほど抵抗がなくても、40人の一斉授業の中ではよほどの自信がなければ発言しにくい。

このとき授業者がどのようにその生徒の発言をくむかで、その授業に対する生徒の姿勢が決定されるといってもよい。自分の発言が最もよく受け入れられ、勇気づけられたとき、生徒はその教科に対しての意欲や関心が増す。しかし、拒絶されたときは、その時間だけでなく、その教科、その先生、ひいては学校そのものにさえ拒絶されたと感じ心を閉ざしてしまうだろう。生徒は授業や学校が嫌いになった理由を、「なんとなく」であったり「あの先生は嫌い」であったりすることが多いため、その発言やその言葉に原因を遡及することはできない。

学校の授業は知識の伝達という要素を持っているが、それだけでなく、生徒が持つ学ぶ権利を行使する場でもある。そういった視点から不登校防止に焦点を当てて、授業実践を組みなおした。

2. 国語科教育と「伝え合う」

近年国語科教育において「伝え合う力」が重要視されている。伝え合う力をつけるための観点としてあげられる活動は「聞く・話す」である。文字による伝達ではなく、音声によるコミュニケーションに重きを置いている。教科書にとられている具体的な活動例を見ると「ディベート」「パネルディスカッション」「シンポジウム」などがある。

コミュニケーション能力の育成として、セミパブリックな状況での発言の機会が増えるのはよいことである。しかし、教室に受け入れる態勢がない場合には、発表者はかなりの緊張を強いられる。そして、上記のように授業やクラスや学校に抵抗感を示してしまう。そこで、発表等の授業ではこの抵抗感をなくすための方策を講じなければならない。どのようにすれば発言することに怖さなくなるか、全体の前で発表できるようになるか。これは「能力」の問題ではなく、それ以前の授業が成立

するかどうかの重要な基本姿勢である。

そこでその受け入れ態勢を作るために、「聞く」ということに焦点を絞り、カウンセラーの方と協力して聞く授業を試みた。その授業実践が「ブックトーク」と「ブックリスト作り」である。

現在国語科では、「聞く・話す」能力として、「事実と意見の関係や、論理性などに注意して話したり聞いたりすること」などがあげられている。しかし、ここには聞く態度や相手を受け入れる姿勢などは見られない。教科の能力としては設定されないものでも、クラスの中では重要な問題である。そこで、教科だけでなくカウンセリングという視点で協働の授業を試みた。国語の授業としては「読書指導」に焦点を当てつつ、相手の話を聞く姿勢などに留意しながら、開かれた教室・開かれた心を目標にして授業を行った。

3. ブックトーク実践

学年：中学3年 時数：4時間扱い

授業計画：

① 夏休みの宿題として読書感想文を書く。

夏休み前に行ったブックリストや、各出版社から出ている小冊子などをもとに好きな本を読み、感想文を書く。

② 授業時間内で、自分の感想文をもとに紹介文・発表原稿に直す。

感想文をもとにして、紹介文・発表原稿に直す。読みたいと思わせる紹介の仕方を考える。(ストーリーを話す・本文の一説を読む・キャッチコピーを考える・実際にその本を持ってきて見せながら話すなど。)

③ 本の紹介・発表

6人ずつの班の中で発表し、班の中で一番読みたいと思う本をピックアップする。クラス全体で、班ごとに一番読みたいと思った本を発表し、クラスとして一番読みたいと思われた本を決める。

留意点と考察：

i ブックトークとは、教師や図書館司書がひとつのテーマに沿って何冊かの本をつなげて紹介することを指す、ここでは、生徒が行う本の紹介という意味で授

業を行った。

また、夏休みの課題として、できる者は一つのテーマで何冊かの本を読み、まとめて書くことを指示した。これは本校での「卒研」につなげるためでもある。

- ii 生徒は自分の読んだ本について話すので、内容については自信を持つことができる。反対に内容について自信がないと、決して発表したがない。提出された感想文や発表原稿に対して、教員がコメントをつけて返す。そのコメントは生徒を勇気づけるような言葉で心がける。
- iii まず少人数の班で発表を行う。これは全体の前で発表する前の緩衝剤の役割を果たす。

バズセッションが個人の意見の発言を促すのに有効であることは知られている。しかし、バズセッションから全体へどう移行するかが課題である。

全体の前で話す生徒は、一度班の中で受け入れられ認められているので、緊張はするものの恐怖感はない。

- iv 発表を聞く生徒にメモをとるように指示する。発表者は自分の言葉が相手に伝わっていることを実感する。

4. ブックリスト作り

学年：中学3年 時数：2時間扱い

授業計画：

- ① 自分が読んだ本の中から紹介したい本を5冊程度選び一言紹介文を付ける。
1行程度でいいので、ポイントを簡単に書かせる。
- ② クラス内で自由に廻り、お互いに紹介し合う。
教育実習生数人と教官も加わり、2・3人から7・8人の流動的な塊の中で情報交換し合う。
- ③ 読んでみたいと思った本を10冊程度友達の紹介により書き写す。
10冊にならなくてもよいが、なるべく多く書くことを指示。
- ④ 最後にクラスで輪になって一冊紹介発表をする。

自分で読んだ本に限らず、友達から紹介された本でも、読んでみたい、読んでもらいたい本を発表する。一人20-30秒。

(この実践は教育実習生が東京大学で受けた授業をもとにして実習期間中に行ったものである。)

留意点と考察：

- i 本のジャンルを問わないために、気楽に書くことができる。
- ii 紹介も1行程度なので、あまり堅苦しく考えず、すぐ書くことができる。ただ、「面白かった」等の安易な

コメントになってしまうことが多く改善点である。

- iii 決まった班ではなく、好きな人同士で混ざって情報交換をするため、心を開いて発言したり受け取ったりすることができる。ただ、問題点が二つある。一つは、男女別になってしまうことである。もう一つは、実習生の先生に多く入ってもらったためにスムーズに行われたのであるが、そうでない場合は、孤立する生徒やグループを作れない生徒が生じると考えられる。
- iv クラス全体が輪になって発表することで、いつもと違った雰囲気の中、聞く姿勢も生まれた。しかし、盛り上がり過ぎてしまったり、コメントが短すぎたり、聞き取れなかったりといくつかの改善点がある。

5. 二つの実践を通して

二つの事例を通してよかった点は、授業以外でも話が広がったことである。休み時間にも本の話をしてきたり、原作が映画になったDVDを貸し借りしたりしていた。生徒はお仕着せの与えられた本の紹介よりは、自分の友達が読んでいていいと感じた本については、読んでみようという思いが強い。さらに友達が実際に持っているという点も利点であり、本屋に行ったり図書館に行ったり借りたりしなくてもすぐに貸してもらって読むことができる。

授業では教師の発問に対してよりよい答えをする一問一答方式が多く見受けられるが、「正しい答え」というものを設定せずにそれぞれが自分の持っている情報を発信し、受け取るという授業も必要である。生徒が自分の発言が受け入れられたと感じるとき、その教科に対しても意欲が増す。

国語の授業の中では、「よりよい発信」という観点で評価することもある。つまりプレゼンテーションの巧拙による評価である。しかし、そのような「能力」としての評価よりも、生徒一人ひとりが受け入れられるクラス作り・授業作りが不登校防止につながると考える。

6. 不登校予防としての観点から

<カウンセラーとの連携>

生徒がクラス内で自分の居場所が得られたと感じた時、学校に来ようという意欲や授業に出ようという意欲が生じるのではないだろうか。反対にクラスの中で孤立していると感じた時、その授業だけでなく学校に来る意欲もなくなる。

クラスというのは授業内だけでなく、さまざまな面を見せるものであるが、せめて授業の中では、生徒一人ひとりを受け入れる態勢を作りたい。そのためには教師一

人の力だけではなく、教師同士もさることながら、教師とカウンセラーとの連携など協力態勢が必要である。生徒が安心して授業に出席できる状況にある時、初めて学ぶ権利が保障されたと言える。

7. その他授業実践

「聞く」ということは評価が難しく、指導することも難しい。それは一面で受動的な要素を持っているからである。そこで従来ある「聞く」指導は、何をどう聞き取れたかという「記憶」に依拠するところが大きくなり、聞く態度や姿勢が後回しになりがちである。しかし、国語教育でも「話す・聞く」に重点を置き、学ぶ権利を保障していると考えられる授業実践も多くある。それについて二つの実践を紹介する。

一つめは「読み聞かせ」である。小学校低学年で多く行われている授業であるが、授業者が本を読んで聞かせるものである。ブックトークを授業者がやる場合にもこ

の実践に当たる。児童は授業者が読み・話すことを全員で聞く。そこに話題の共有が生まれる。これは何を覚えなければいけないとか、テストに出るからとかではなく、児童の興味関心より生じて授業者が設定するものである。

二つめは「群読」である。これは数人から数十人で声を合わせて詩や小説を読む活動である。群読にはその台本を作る過程で、読解や解釈という活動が含まれる。しかし、何より人と声を合わせるという活動により、自分の居場所がうまることが重要である。一人一人がいなければ、その物語は完成しないのである。そして、自分の声が間違いなく他者に受け止められ、響きあっているという実感が得られる。

以上のような実践を積み重ねることにより、クラスとして他者の意見や考えを受け入れるという根本的な姿勢をはぐくみ、そのことが不登校を防止し、学ぶ権利を保障するものであると考えられる。